「英語教育改善プラン」に基づいた教員の英語力・指導力向上に向けた取組
「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～宮城県～

【宮城県における課題】
○小・中・高一貫した英語教育を土台とした授業改善が急務である。
○授業改善のためには，英語担当教員の授業力向上が必須であり，そのための研修等を実施し，CAN－DOリストから評価まで一貫した授業づくりに繋げる。

具体的な対策：研修協力校を中心とした研究の成果の周知及び研修会・講演会の実施と教育委員会主催の研修会の実施により，授業改善を図る。

【具体的な取組】

○ 研修協力校における研究及び研修会・講演会
研修協力校9校が，以下の3つの研究テーマに沿って実施
・「『CAN-DOリスト』を活用した授業改善」
・「4技能5領域におけるバランスの良い授業内容と評価の研究」
・「ICT機器を活用した授業研究」

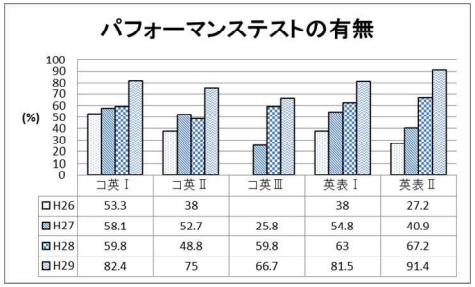
○ 英語担当教員指導力向上研修会
国の中央研修を受講した英語教育推進リーダーを講師とした研修を通して，学習指導要領及び新しい英語教育の在り方の趣旨に沿った指導や評価を目指す。前年度のリーダーもアドバイザーとして参加する。県独自にアセスメントのセッションを行う。

○ 県教育委員会主催の研修会
・「新学習指導要領並びに『CAN-DOリスト』活用研修及びワークショップ」の開催
・「外部との連携によるスキルアップ研修」をコミュニカティブな授業展開のためのスキル取得を目的とし，国際教養大学と連携し開催

【成果】

○ CAN-DOリストにおける到達目標の設定と振り返りが100%

○ パフォーマンステスト実施の割合が飛躍的に増加

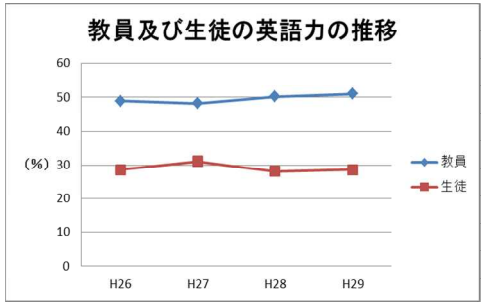


	コ英Ⅰ	コ英Ⅱ	コ英Ⅲ	英表Ⅰ	英表Ⅱ
H26	53.3	38		38	27.2
H27	58.1	52.7	25.8	54.8	40.9
H28	59.8	48.8	59.8	63	67.2
H29	82.4	75	66.7	81.5	91.4

【課題】

○ 英語担当教員の英語力の割合が横ばい状態。
受験機会を増加させるための工夫が求められる。

○ 生徒の英語力の割合にも大きな変化は見られず，依然として低い状況が続いている。



【成果の周知と課題解決に向けて】
○ 「みやぎの英語教育推進委員会」において，事業内容を検討し，生徒の英語力向上に向けて協議したことを，各高等学校へ周知する。
○ 効果的な研修の在り方を検討しながら，CAN-DOリストの作成と振り返りを中心とした授業改善の徹底を継続して進める。

平成26～30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～宮城県岩ケ崎高等学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- 入学時に英語を苦手とし，苦手意識が強い生徒が多い。→ 「英語を使う」学習で，自信・意欲向上へとつなげる。
- 中学校基礎知識の定着が不十分である。→ アウトプットを体系的に取り入れ,必要性を感じさせながら定着を図る。

具体の取組の内容

○「書く」を中心とした体系的アウトプット活動を全学年で行う（1年：英語日記　2年：タスク型エッセイ　3年：社会的エッセイ）

1年夏休みまで英語日記を最低3行書き毎日提出する。その後1～2年では1週間に1つのペースで様々なタスクエッセイに取り組む。3年生では社会的エッセイに取り組む。2～3年生ではリライトまで行う。

○「話す」について，全学年でスピーキングテストを実施

各期スピーキングテストで生徒の発信力を評価する。全体評価の15%程度が「話す」評価である。
内容の目安として，1年インタビュー　2年カンバセーション　3年ディスカッション　を設定している。

○毎年研修会・公開授業を実施し，県内の小中高多くの先生方が参加

本校英語科の指導共有・指導力向上，また県内先生方への本校教育内容の公開を目的としている。
毎年多くの先生方が参加し，講師による授業の体験や，活発な意見交換が行われている。
講師先生は2016年度：関西大学　田尻悟郎教授　2017年度：工学院大学中学　髙橋一也先生　2018年度：実用英語推進機構　安河内哲也先生

成果①

◎英語を書く機会が増えたことで，英語学習への意欲が向上した

- 日記から始まる身近な「書く」活動を通して，書くことを楽しみ，書くことに対しての抵抗がなくなった。「書く」を「話す」につなげたり，インプットにつなげたりするなど生徒の学習意欲向上が見られる。
- 生徒が英語でのコミュニケーションに積極的に　取り組み，授業でいきいきと学ぶようになった。
- 研修会や公開授業を通して，本校英語科の指導法共有や協力体制の強化が進んでいる。

成果②

◎英語をアウトプットする機会が増えたことで「自分で使える基礎表現」の定着が進んだ

- GTECにおいて，体系的指導開始後の3年間でライティングの伸びが大きくなった。

(3年7月時のライティングスコア 直近4年)

H27	H28	H29	H30
92	101	102	109

- 英検受験者とともに合格者も増加した。

全体的に英作文のスコアが向上している。
(合格者数)　27年度 13名 → 28年度 29名 → 29年度 47名 (準1級1名含む)

今後の課題・方向性

①高校レベルの語彙・文法の定着が不十分

・高学年で必要となるレベルの語彙文法の定着は生徒個人の勉強で補うことが多い。全体指導の中で行うことが必要である。

②生徒が行う即興的に発信する力の向上

・即興の発話，時間内のライティング力に課題が残る。
・準備してのアウトプット活動を3学年で高度化して「時間内に書く」「即興で話す」を充実させる。

③教員の多忙化

・英文添削はどうしても時間がかかるものであり，授業外の時間が多く割かれている。生徒同士の添削など，工夫が必要である。

平成26～30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～宮城県佐沼高等学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

・スムーズで自然な意思疎通ができるように、意味のまとまり・論理構成・スピードを意識させる指導を行う。
・基礎的な英語力を身につけ、英語で書かれた多種多様な文章や考え方に触れることで、多文化を理解する心を養う。

具体の取組の内容

○授業ワークシートの共有
　担当者間の目線合わせ、生徒の情報共有、授業のフィードバックに有効
○帯活動としてのスピーキング活動
　毎時間行うことによって、生徒の意識・意欲が向上
○CAN-DOリストの見直しと活用
○GTEC4技能テスト、英検チャレンジ実施
　GTEC4技能テスト：1、2年生全員受験　英検チャレンジ：全学年で実施
○公開授業及び研究授業実施（資料1）
○小中学校との情報交換
　協力校とCAN-DOリスト、考査問題について情報交換

（資料1）

●公開授業来校者感想
・自分の意見を英語で伝えるための土台がしっかりできている。
・英語を使うことに対しての抵抗が感じられなかった。
・オールイングリッシュでの進行，生徒のディベートの様子など，とても参考になりました。
・授業に表現活動をどのように取り入れていくかという点で非常に参考になりました。

（資料2）

●Q：英語を身につけたい程度

	比較対象（各2学年第2回）				
	2018	2017	2016	2015	2014
日常から将来での活用	81.9%	78.6%	73.8%	65.2%	68.9%

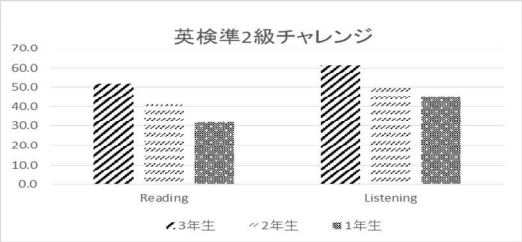
	比較対象（現2学年、現3学年）				
		2年2回	2年1回	1年2回	1年1回
日常から将来での活用	現3学年	78.6%	79.0%	71.1%	74.1%
	現2学年	81.9%	82.7%	77.8%	80.0%

〈スタディーサポート学習調査結果より〉

成果①

◎英検チャレンジによる弱点把握

昨年度Listeningに伸び悩みが見られたため、Listening活動だけでなくSpeaking活動や音読練習、内容把握のような読み取りの練習においてもスピードを意識させた。その結果、今年度はListeningの正解率がReadingの正解率を上回った。



成果②

◎基礎的な英語力の向上

アウトプット活動やパフォーマンステスト、外部検定試験に向けて学習する中で、基礎的な文法・語法などが身についたと考えられる。また、CAN-DOリストの活用やToday's Goal提示が、言語活動に意欲的に取り組む動機付けになったと思われる。（資料2）

●現2年生スタディーサポート英語成績推移

年度	1年第1回		1年第2回		2年第1回		2年第2回	
偏差値	単純	累積	単純	累積	単純	累積	単純	累積
80～							6	6
70	3	3	6	6	5	5	13	19
60	26	29	33	39	34	39	34	53
50	72	101	75	114	70	109	81	134
40	77	178	71	185	73	182	55	189
30	23	201	13	198	16	198	7	196
～30	1	202		198		198		196

今後の課題・方向性

①基礎定着に向けた定量的・定性的データ分析の継続的実施

②「目標→活動→評価」に基づいた効果的な指導と観点別評価に基づいた定期考査作成

③小中高英語教育に関するさらなる連携

④ICT活用

⑤言語活動の高度化（Discussion，Debate、Essay Writing)と言語使用の正確さ

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～宮城県志津川高等学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

・中学時における学習内容が十分に定着していない生徒が多く，英語を苦手としている。
・英語を通じて積極的にコミュニケーションを図る態度を育成するとともに，基礎的な能力を養う。

具体の取組の内容

・授業公開を年に2回（5月と10月）それぞれ10日間行う。
・年に2回，生徒に対して授業を評価してもらうアンケートを行い授業の改善に役立てる。
・今年度は，外部専門機関と連携した英語指導力向上事業として，県外視察2校と県内4校へ延べ8名が先進校を視察した。
・また，同上の事業として東京学芸大学　名誉教授　金谷　憲先生，
東桜学館　教諭　山口　和彦先生を迎え公開授業，及び講演会を実施した。

成果①

今年度からの取り組みであるため昨年度の数値と比較をしてみた
①生徒による意識調査（アンケート）
9項目において，肯定的評価から否定的評価を4段階にし，平均値が2.5となるようにした。
H29　3.2　H30　3.4
（平均値が0.2ポイント上昇した）
②本校の英検の取得者数
・H29　英検3級　6人
　　準2級　5人
・H30　英検3級　7人
　　準2級　1人
　　2級　1人

成果②

〇教員の変容
・ 授業を計画する際に，学習到達目標から評価まで一貫性をもって考えることができるようになった。
・ 授業に取り入れる言語活動の目的を明確にし，且つ生徒と共有しながら，進めることができるようになった。
〇生徒の変容
・ ペアやグループの活動に積極的に取り組む姿勢が身に付いた。
・ 課題の発表を堂々と行うことができるようになった。

今後の課題・方向性

・ 英語に対する苦手意識を抱いている生徒は依然として多いことから，学習内容の定着を図ることを引き続き課題とする。
・ 生徒の学びの状況を丁寧に観察し把握することが必要であり，きめの細かい指導を継続していく。
・ 生徒の達成感を成就させるためにも，教材の精選をし，多少の負荷のかかる言語活動に取り組ませることを継続させる。
・ 英語力の向上のためには，授業以外における学習の時間を確保させることが必須であることから，課題の提示の仕方等工夫を行う。

平成26～30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～宮城県石巻高等学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

即興で英語を話すことが苦手な生徒が多い → 手立て → **授業・パフォーマンステストにおける一貫した即興性重視の指導**

具体の取組の内容

一貫した即興性重視の指導

＜取り組み①＞授業は「即興トーク」で始まり，「即興トーク」で終わる

・授業の導入部分で，その日扱うテーマに関するスモールトークをペアで実施。まとめ部分では，その日学習したテーマについて自分の意見を理由も交えながら論理的に述べるタスクを即興で行う。

＜取り組み②＞苦手意識をなくすために「基本表現」の徹底練習

・ただ単に“Let’s speak!” と指示するのではなく，トピックや状況に応じた「基本表現」を生徒に提示し，それを繰り返し音読練習してからトークに入ることで，「これなら話せる」という意識を持たせる。

＜取り組み③＞授業で体得した「即興力」を評価するパフォーマンステスト

・各期の最後にはパフォーマンステストとしてスピーキングテストを実施（C英語・英語表現）。授業で扱ったテーマに似たトピックがその場で与えられ，それをもとにインタビューやグループトークを行う。

▲研究授業の1コマ。相手の意見をリピートした上で，自らの意見を述べる「チェーントーク」。基本表現を練習した後，話すテーマをその場で与え即興でトークする。

成果①

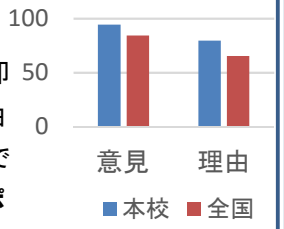
GTECスコアの上昇

※2018年度（第34回）第3学年スピーキングスコアのみ掲載。

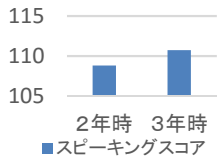
授業で強化している「即興で自分の意見を理由も交えて述べる」課題では，**全国平均より10ポイント以上高かった。**

スピーキング全体で見ても**学年を追うごとにスコアが上がっており，**授業の成果が現れている。

全国平均との得点率比較
(Part D「自分の意見を述べる」)



年次得点比較



成果②

生徒・教員の英語使用意識の向上

※生徒・英語科教員の声より

・「英語で話す場面が多いから，**間違っていたらどうしようなどと考えずに積極的に話せるようになった**」（生徒）

・「授業で生徒と英語でやりとりするのが楽しく，**英語を使って会話するのが当たり前になっている**」（教員）

※平成30年度「英語教育実施状況調査」において，本校全ての英語科教員が「授業に占める言語活動の時間の割合」の項目で「授業中、おおむね言語活動を行っている（75%程度以上～）」と回答。

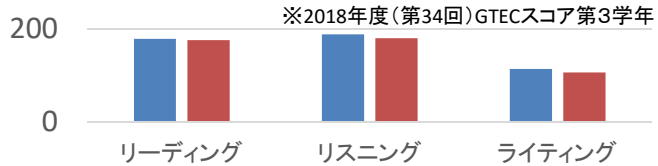
今後の課題・方向性

＜今後の課題＞ 4技能の総合的なスキルアップ

スピーキングと比べ，他技能の伸び幅が小さい

全国平均との得点率比較

※2018年度（第34回）GTECスコア第3学年



全国平均より高いが，+5ポイント前後にとどまっている

＜方向性＞

より一層4技能を有機的に結びつけた授業の展開

「リスニング→スピーキング」「スピーキング→ライティング」など

平成26年度～30年度「英語教育強化地域拠点事業」 ～宮城県仙台向山高校～

目的

・英語教育におけるICTの効果的活用法の研究
・アウトプット活動を多く取り入れた授業による生徒の英語力の向上

取組の内容

○ICT機器を活用した授業
- タブレットPCを使用し，パワーポイント等のスライドを投影しながらの授業
- タブレットPCやipodでスライドや画像等を投影しながらの授業
- ipod等を使用した音声の提示

○アウトプット活動を多く取り入れた授業
- テーマを与えての英作文を課ごとに行い添削
- 毎定期テストに語数指定の英作文を出題

○ICT機器を活用したスピーキング自己評価
- 動画を撮影しそれを各自に見せて，自分のテストを振り返る機会を与える。

成果①

◎ ICT機器を使用した授業ではプリントと黒板のみを使用した従来型授業よりも言語活動を工夫できる。

・画像や映像を効果的に使用することができるので,生徒を惹きつけ，理解を助けることができる。
・タブレットPCの活用により，タイマーやスライド，動画など複数の補助具・教材を一つにまとめて持ち運ぶことができ，場面に応じて適宜使い分けることができる。
・あらかじめ板書の準備ができるので，効率的に授業を展開できる。

成果②

◎ 3学年段階で外部の英語検定試験を受検したことのある者およびCEFR A2レベル以上の資格を有する者の増加

資格名	人数
在籍数	200名
受検したことのある者	130名
CEFR A2レベル相当以上の資格を有する者	90名

（H30年12月現在）

- アウトプット重視の授業により英語への抵抗感は少なくなっており，検定試験等を受検する生徒数は年々増加している。

成果③

◎ スピーキング評価方法を改善できる。

・スピーキングテストを録画する
・評価とともに、生徒に自分のスピーキング動画を見せる。
→ Attitude（態度）/ Fluency（流ちょうさ）/ Description（描写力）/ Opinion （意見）に関して,客観的に改善すべき点を知ることができる。
・Reflection（省察）が深まり、生徒のよりよい目標設定や動機付けとなる。

《生徒の声》
・自分の発表が他人からはどう見えるのか分かった。
・どう改善すればよくなるのかが分かりやすかった。
・映像があるとプレゼン練習の参考になる。

◎ 生徒はICTを使用した授業を肯定的にとらえている

質問　説明のわかりやすさはどうですか（特にICT活用を進めているコミュニケーション英語Ⅱにおける回答結果）

	回答
良い・とても良い	58.5%
ふつう	31.2%
悪い・とても悪い	10.3%

本校生徒対象（H30.9.26実施）

◆ICT機器を使用した英語の授業の利点（自由記述）
・画像があると説明が分かりやすい。
・授業がテンポ良く進む。
・要点が分かりやすい。

今後の課題・方向性

① 全学年でICT機器を積極的に活用した授業を実施する
昨年度は1・2学年のみ実施，今年度は全学年で実施しているが，タブレットPCやスライドの活用では個人差がある。

② 向山スタイルの確立
3年間を見通した指導スタイルを共有することで，学年間および担当間で指導の一貫性を保つ。

③ルーブリック等を用いた評価法の確立

④設備の充実
プロジェクター・スクリーン等の機材不足やWi-Fi環境の不備の問題が続いている。

平成26～30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～宮城県仙台東高等学校～

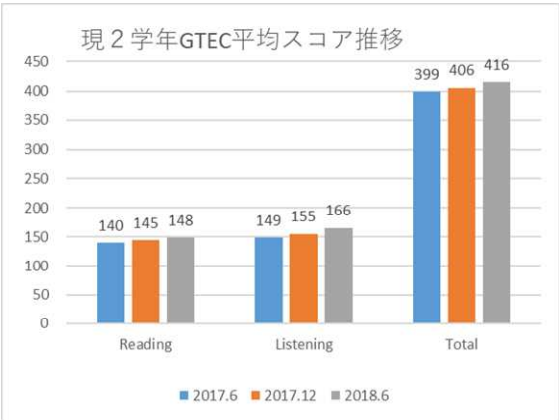
現状の課題と課題解決のための手立て

・学習到達度目標に沿った指導や評価の研究・改善
・系統的なパフォーマンス指導による生徒の英語力向上

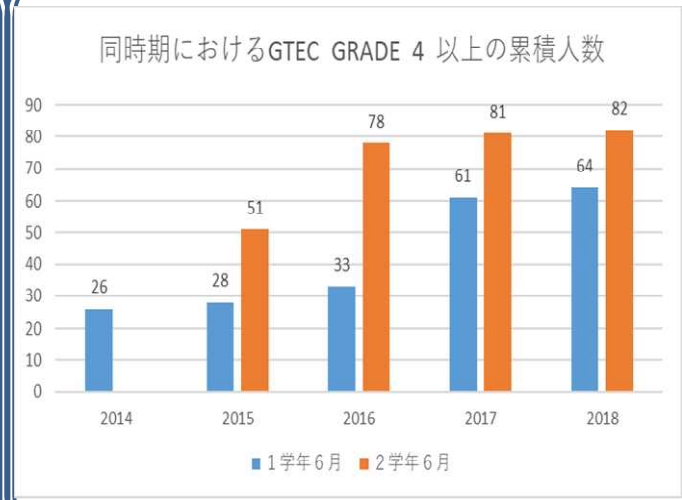
具体の取組の内容

（1）Writingの指導について研究・検討：先進校視察（富山県立富山南高校学校）
（2）系統的指導：レシテーション・スピーチ・プレゼンテーション・ディスカッション・ディベートへつながる指導実践
（3）英語教員研修会：立命館大学　教育開発推進機構　教授　山岡憲史

成果①



成果②



今後の課題・方向性

アウトプット（表現）力のさらなる育成
Writing及びSpeaking力の育成
（1）Writingの量は増やしたが満足のいく結果が出ない
・より効果的なEssay Writing指導の研究を継続
（2）パフォーマンス指導を増やしたが思うように結果が出ない
・GTEC　Speaking　Testの結果
グレード4以上の累積人数
1年（55名）2年（47名）3年（64名）
授業での指導改善　→　外部検定試験等で伸長を確認　→　指導の改善・研究を継続

平成26～30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 宮城県泉高等学校

現状の課題と課題解決のための手立て

- ４技能統合の言語活動を充実させながら，特に生徒の発信力を強化する。
- 適切な評価とフィードバックを通じて，次の学びへの動機付けを図る。

具体の取組の内容

- 共通ハンドアウトを使用する。
- 相手を替えながらのペアワークを多く行う。
- Information gap があるスピーキング活動を実施する（頻繁に行うアウトプット活動を学習手段とする）。
- サマリーを考え，自分の意見を加える（話してから書く）。
- 聞く・話す・読む・書く，それぞれの目的を明確にした上で活動する。
- パフォーマンステストの実施（年４回程度），その場で生徒にフィードバックを行う。
- 定期考査問題の工夫 （オリジナルリスニング・教科書の本文リライト・初見文など）。
- 意識調査の定期的に実施（年５回）。

成果①

Fluency の伸び

【スピーキング】

→ 楽しみながら，より素早くできるようになった。

→ やりとりが長く続くようになった。

【ライティング】

→ 論理的に書く型を身に付けた。

→ 物事に対する問題意識と自分の意見を表現する習慣が付いた。

→教室外でも，楽しく英語使う生徒の増加 （各種検定試験の結果には表れにくい）

成果②

英検上位級合格者数の増加

2017年度 準1級 2名

2018年度 準1級 7名（二次合格率100%）

GTEC上位グレード者取得数の増加

		【2016 31回】	【2017 33回】
GRADE 7	英語科	0名	3名
GRADE 6	英語科	7名	3名
	普通科	3名	5名
GRADE 5	英語科	23名	15名
	普通科	39名	49名

今後の課題・方向性

【課題】

- スピーキングとライティングにおいて，accuracy をどう伸ばしていくか。
- 校内外の様々な英語学習に関するデータを分析し，そこから見える課題をスタッフ全員でいかに 共有するか。

【方向性】

- 持続可能な指導法・評価法を確立するためにこれまでの実践を検証し，精選する。

平成26～30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～宮城県白石高等学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

課　題：英語の4技能5領域を総合的に伸ばす。
手立て：授業内で4技能5領域をバランス良く取り扱う時間を確保するために、レッスン毎に教科書の扱いを変える。

具体の取組の内容

①研修会と公開研究授業の実施
　平成28年度 「主体的学習者の育成を目指して」 関西大学外国語学部教授　田尻悟郎先生
　平成29年度 「教えない授業～学びあい成長しあう生徒たち～」 東京都立武蔵高等学校附属中学校　山本崇雄先生
　平成30年度 「レッスン毎に教科書の扱いを変えるTANABU Modelとは」 青森県立田名部高等学校　堤孝先生
②小中高等学校連携推進会議・研修会の実施
　　平成28年度より、年2回公開授業を実施
③GTEC for STUDENTS　による英語力の把握
　　平成29年度12月回よりspeakingテストの導入
④1年次において、TANABU Modelを採用し、レッスン毎に教科書の扱いを変えることで、授業内でパフォーマンスを行う時間を確保する。

成果①

〇GTEC （高校1年生第1回の変移）
平成30年度入学生　378.2
平成29年度入学生　376.2
平成28年度入学生　377.5
平成27年度入学生　357.8

〇GTEC （入学時からの変移）
Reading
現1年次　136.1
現2年次　132.9→147.3→157.0
現3年次　134.0→150.2→160.5→170.3
Listening
現1年次　141.8
現2年次　142.0→151.2→170.4
現3年次　144.0→156.5→161.2→188.3

成果②

〇 教員の授業改善に高い効果
　ここ数年、国内でも屈指のご高名な方をお招きし講演をいただいたことで、教員が自分の授業を見直す大きなきっかけとなった。
〇 英語を使うことへの抵抗感が減少
　特に1年次では、レッスン毎に教科書の扱いを変えることで、入学当初より授業内で英語を使う時間を確保することができたため、リテリングやスピーチ、プレゼンを数多く行うことができた。その結果、例年の生徒と比較すると、英語を人前で話したり、自分の意見を書いたりすることへの抵抗感がない。

今後の課題・方向性

①研修機会の充実
　・校内のみならず、足繁く通える環境の整備
　・教員同士で研修しあう機会を設ける
②小中高の弾力的な授業見学を通した交流
　・お互いの校種を自由に行き来し見学しあえる雰囲気づくり
③Output活動の授業内外での充実化
　・社会につながる授業づくり
　・学びの個別化を図る
④5領域での評価方法の確立
　・校内の評価規定の弾力的運用
　・評価基準となるRubricの策定

平成24～30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～宮城県涌谷高等学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

課題：主体的な言語活動を取り入れ学習意欲を高める授業を目指し，地元中学校との連携を図る。
課題解決のための手立て：中学校等の情報交換を基に，自主性を高める授業改善

具体の取組の内容

①地元中学校との相互授業参観・検討会の実施

地元中学校の取り組みに学び，中高で連携した英語力の向上を図った。その一環として，中学校の取り組みを模範とした形でToday's goalの提示と振り返りを全ての授業で行い，生徒の主体性を促すよう授業改善を行った。また中学校のCan-Doリストを元に，中高で一貫した学習到達目標を設定するなど地域一体型の英語教育の充実を図った。

②授業改善のための公開授業および研修会の実施

英語科全教員が授業公開をし，互いの授業の見学と検討会を行った。また研修会への参加を積極的に行い，英語科でのフィードバックを密にすることで，互いの授業改善を図った。

③パフォーマンステストの内容充実

スピーチやプレゼンテーション，スキット，ライティングによるパフォーマンステスト等，題材に合わせて内容を充実させた。また生徒同士で相互評価を行い，お互いの長所や次回へ向けた課題の発見にも繋がった。

成果①

◎全体的な英語力の向上

（H29 2年生･･･1年次に比べ、約10ポイントUP）

授業の中でバランス良く4技能を使った活動を取り入れることにより，GTECでは3技能(※)全て成績が向上している。毎時間メリハリをつけて複数の活動を行うため，生徒の学習意欲の向上，集中力の維持にも効果が見られる。

※Speakingは実施せず
（H28,29GTEC for STUDENTS 分析より）

成果②

◎英語科全員がチームに

4技能を取り入れ、言語活動を充実させた授業作りについて、日々情報交換しながら、生徒の英語力向上のために努力している。ワークシートは担当者間で共有し、各学年で統一した指導となるよう配慮している。校内では、積極的に研究授業、合評会を行い、授業力向上に努めている。ICT機器も全教員が積極的に活用し，学習の一助となっている。

今後の課題・方向性

1. 学力低下が以前にも増しているため，授業について来られない生徒が増えている。
⇒ 基礎力定着に向けた教材の活用や，週末課題等の課題を充実させ，学力向上を図る。

2. ALTの活用
⇒ 授業前の打ち合わせをより密にし，生徒主体の授業作りに取り組む。

3. 英語学習の成果を発表する機会の充実
⇒ パフォーマンステストの機会を充実させるだけでなく，内容の改善や他学年，他教科の教員にも発表する場を設け，英語学習へのモチベーションを高めさせる。